



雨上がりの朝、里芋の葉に雨水の玉が乗っていました。(左の画像) 天然の宝石のようでした。昼夜の寒暖差が大きい時期の早朝にも、このような景色が見られます。越谷市が管理・運営している古民家「大間野旧中村家住宅(大間野町



夏至の頃の和棉
(右の画像は蕾)

1-100-4)」と「旧東方村中村家住宅(レイクタウン 9-51)」では和棉を栽培しています。生長の様子をご覧いただけたら幸いです。盛夏には開花し、秋には綿毛を見せてくれます。

243年前の事だけど

「再建への取り組み、現代に通じる」

蒲生公民館主催の「がもう楽生塾」の中で、6月に引き続き7月にも当課職員が浅間山噴火と越谷についてお話をさせて頂く機会がありました。これは天明3年(1783年)のことですから、今から243年前の出来事です。昨年の今頃にこのことについてのパネル展示(「越谷まなびる一む」でご覧いただけます)を行いました。この内容に新たに別の史料も加えての講演でした。概要は以下のとおりです。

鎌原観音堂



現在の地表
この下6mに
白骨遺体

◆埋まった村 浅間山北麓の当時の鎌原村は現在の地表下5~6mにありました。噴火による土石流で一気に埋まってしまいました。昭和50年代に一部が発掘され、二人の白骨遺体が確認されました。600人ほどの人口の村で、犠牲者は470人ほど。村内で避難して助かった人は93人でした。

◆土石流 鎌原村を飲み込んだ土石流は更に吾妻川に流下し、流域の村々を襲いました。この犠牲者は1500人位になり、吾妻川から利根川に流されました。幸手市の権現堂川にも人馬の遺体が流れてきたと記録されています。一部は銚子や江戸湾にも達し、杉田玄白は随筆『後見草』にそのことを記しています。

◆鎌原村再建 被害調査

査をして復興計画を立てた幕府役人の根岸鎮衛は著書『耳囊』にその様子を記しています。それによると、被害の少なかった近隣の村の名主たちが仮住居を建てて食料を提供したようです。更に驚くことに、その名主たちは夫を失った女性と妻を失った男性、子を失った人と親を失った子供を組み合わせで新しい家族を構成するように説得したのです。3ヵ月続いた噴火の後に、埋まった村の上に11世帯で再出発しました。この世帯は2人世帯、3~5人世帯だけでなく、1人世帯もあったようです。

旧鎌原村民の子孫の人の言葉

5~6m埋まってしまった村の上に新たな家族と村を再建したことは、私も不思議に思います。それは、この下に家族・先祖が居るという気持ちが強かったのでしょうか。だからその後240年も慰霊の行事が続けられたのだと思います。

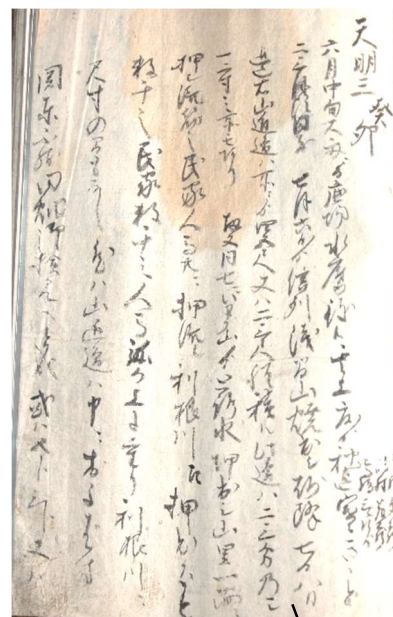
東日本大震災の慰霊祭に招かれた時、東北の人は「自分達はかつての大津波の教訓を十分に伝えて来なかったことを後悔している」と言っていました。教訓を語り継ぐことの大切さを改めて感じました。

(観音堂奉仕会代表 K 氏)

◆越谷市域では 市の指定文化財になっている古文書『越巻中新田の産社祭礼帳』と『西方村旧記』には越谷地域にも大きな被害があったことを記してあります。降灰によって昼でも行燈を灯したことや作物が実らなかったことです。また、飢饉に備えて藁餅(非常食)の作り方のお触れが出たことも記録されています。

◆そして今 天明3年(243年前)に、幕府は96,000両もの復興費用を熊本藩に命じました。そのうち熊本藩庁からは1万両を拠出しましたが、残りの大部分は藩の領民から集めたのです。個人や店、村単位で集めて拠出しました。(『天明三年浅間山噴火史料集』東京大学出版会より) そのことがあって、2016年には熊本地震に際して、旧鎌原村を含む現在の孺恋村では「熊本地震義援金」を集めて送ったとのこと。今、富士山噴火が懸念されていて、越谷市でも市ホームページに「富士山の噴火・降灰に備えましょう」というページがあります。

聴講して下さった方々の感想を一部ご紹介します。



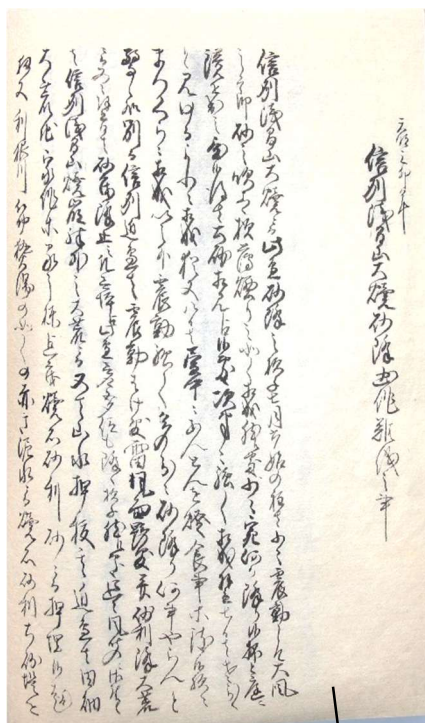
『越巻中新田の産社祭礼帳』

現・新川町辺りでは5cm位の降灰が記録されています。

★記録を残す、語り継いでいくことの大事さを再認識した。越谷関連の2つの古文書を初めて知った。

★生き残った人々への支援、再建への取り組みは現代に通じるものを感じた。

★日本の統治機構は素晴らしい。



『西方村旧記』

現・西方地区では昼間に行燈を灯して食事したことや人馬の死骸が沢山流されたこと、晩稲は穂が出ずに凶作になったことなどが記されています。

★(村の再建方法について)欧米列強来航以前の日本には近代化で失われたものがあり、ある意味では豊かで平穏だったということでもある。

★越谷市の歴史文化にも興味がわき、もっと深く知れたらと思います。

★大変な災害があった事、その対応が率直で画期的だった事、素晴らしいと思いました。この事例を現在の日本にあってどのような教訓、対処と出来ることはないか……生涯学習課として、過去を振り返ることにあきたらず、今後、未来に思いを馳せて行ってほしい。

★観音堂奉仕会の代表者の言葉、大切な内容だと感じました。

★22~29 歳頃に前橋市、52~54 歳に熊本市で仕事をしていました。懐かしさを感じました。

★自然災害と向き合った人々の熱い息吹を感じました。先人達を見習いたいものです。

★日本は火山国です。他人事ではなく常にこの様な事例を念頭において日常を過ごしたいと思います。